

令和5年度島根県立大学人間文化学部

3年次編入学試験

保育教育学科 小論文問題

【問題】

次の文章を読み、筆者の主張を簡潔に述べるとともに、筆者の論を踏まえて、自由な社会における他者との関り方についてあなたが考察したことを、ふさわしい題名をつけて800字以内で論述せよ。なお、下記の三つの語句のうち最低一つの語句を本文中に用いること。(100点)

語句：①集団と個 ②子どもと大人の関係 ③自由の代償

だれにも煩わされない社会を私たちは望んだ

われわれはいま、自由な社会に生きている。

この社会が自由であることをこの上なく愛している。自らが享受している権利である自由を、だれにも邪魔されることのない社会を肯定し、そして推進している。未永く継承されるよう、努力を惜しまない。

自分の望んだように自由にふるまえること、それは他者からの望まない関わりや強制を拒絶できる権利を有することと同義である。だれもが愛してやまない自由という名の権利は、この社会で自分の存在そのものを確立する大前提として肯定されてきた。

他者からの関わりは、自分が気に入らなければ拒絶できる——そのような自由は、とりわけ子育て世代の人びとから強く求められてきた。自分がいま育てている小さな子どもに、不審な他者からの不要な接触を受けるリスクを最小限にするためだ。「子どもとその親にとって安全・安心な社会を実現するべきである」という名目で、こうした社会的要求は肯定されてきた。

子どもを連れて歩いていると、いっさい面識のない間柄であるのに、突然声をかけたり、さも親しげに子どもに触ってきたりするような人物は、ひと昔前であれば街の至るところで頻繁に見かけられたものだ。子育ての助言をしたがったり、あるいは単に子どもをあやしたかったりと、目的はさまざまだった。

だが、今日においてはそのような人びとは、親たちからすれば不審人物であり、自分と子どもの安全・安心な暮らしを妨げる迷惑な他者であると見なされるようになった。「他人が危険な感染症のリスクを持っているかもしれない」という懸念が多くの人にとって現実的なリスクとして認識されるようになった時代にはなおさらだ。

「子どもに触ろうとしてくる他人」「子育てに対してあれこれと口出ししてくる他人」を、迷惑な他人、もっといえば安全で安心な暮らしを脅かす不快な他人として定義し、これらを排除することで、自由で快適な生活を手に入れてきた。かつての時代の親たちがそのような他人を必ずしも歓迎してきたわけではない。ときには押し付けがましく、鬱陶しいと思ったこともあっただろう。けれども、他人とは得てしてそういうものだという、ある種の諦念があった。しかしながら、現代社会はそのような人を退けてもよいとする大義名分が人びとに付与されている。

こちらがニコリ笑うと反応し、小さな手足を動かす赤ちゃん。街で見かけると、他人の子であっても声をかけたくなくなってしまう存在だ。かわいさあまって、その小さな体を触りたくなくなってしまう人も多いのではないだろうか。

だが、ちょっと待ってほしい。いくらかわいいからといって、許可なく子供を触るのはルール違反だろう。実際、他人のそういった行動を不快に思うママは少なくないようで…^注。

いますぐにでも助けを求めなければ生活が危ぶまれるほどには、経済的にも人間関係的にも困窮していない人にとってみれば、自分がまったく望んでいない人物から、まったく望んでいないタイミングで関わりを持たれることは、ほとんど無用なことだ。社会生活を平凡に送っていくことにはなにも困っていない人に、おせっかいな他人が日常生活の場に現れると、そのたびに歩みや作業を止めてニコニコと愛想笑いを浮かべて受け入れなければならない。そんな規範がいまだに存在することは、自由で快適な暮らしを享受する個人の権利が侵害されているようにも感じられる。拒絶したくなっても無理はない。現代人の感覚からすれば、自分の私的領域にたやすく他人を招き入れることを平然と受け入れていた時代の方がおかしいと感じるだろう。

他者からの不愉快な干渉を最小化し、個人主義的な社会生活の便益を最大化するライフスタイルは、その代償として、いざというときに助けてくれる他者が自分のもとに馳せ参じてくれる可能性をも一緒に除去してしまうことになった。

弱者にのみ降りかかる自由の代償

もっとも、現時点ではまったく困窮していない、なおかつ今後も困窮する見込みの薄

い人にとって、「いざという時」はまずやってこない。自分に与えられた当然の権利を行使することによって生じる副次的影響を自分のこととして想像する理由がない。ひき続き、個人が持ちうる自由を最大限謳歌することに、なんらためらう道理がないのだ。

しかし、進退窮まるぎりぎりのラインで生活している人やその子どもはそのかぎりではない。他人から干渉を受けない自由が全社会的に是認される代償として生じる「助けしてくれる他者の不在」は、厳しい生活環境に置かれた人びとにとっては大きなリスクになる。

この社会のほとんどの人が、【中略】生活が致命的に困窮していることはない。だからこそ、個人主義的な社会の副産物に臆することなく「自分が必要としているとき以外に声をかけてくる者は、自由の侵害者であり、安全・安心な暮らしを脅かす加害者である」とするいまどきの論調に素朴に賛同する。この社会的風潮は、だれかが気軽に権利を行使するたびに強まっていく。迷惑な他人に煩わされない自由で快適な社会は、大勢の人びとに快適な暮らしをもたらし、ストレスフリーな人間関係を実現していった。だが、だれもが歓迎して謳歌する、自由で個人的で快適な社会で、その代償を支払ったのは…【以下略】

注：井上祐亮「赤ちゃんを無断で触る他人にイライラ… 私が神経質なだけ？とあるママの葛藤」『Jタウンネット』2020年5月6日、<https://j-town.net/2020/05/06304456.html>、最終アクセス 2022年9月21日

出典：御田寺圭『ただしさに殺されないために 声なき者への社会論』大和書房、2022年（一部改変）